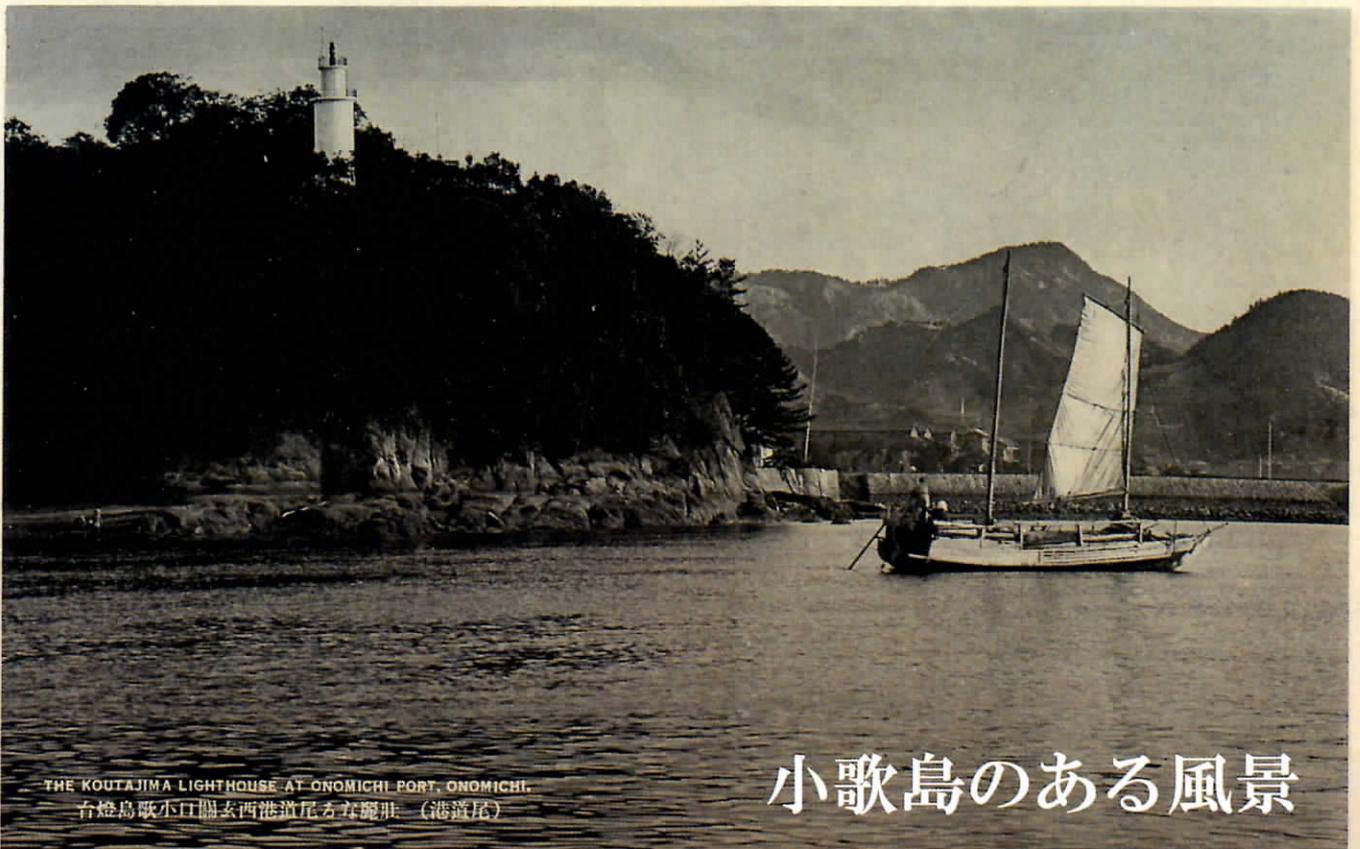


尾道市市史編さん委員会事務局だより

市史広報 *第3号*

CONTENTS

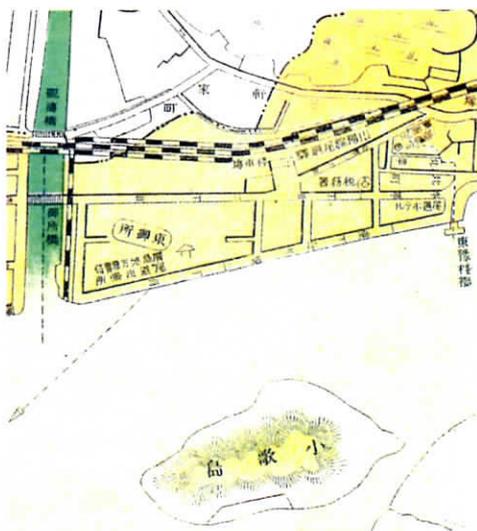
- 【巻頭特集】小歌島のある風景
- 【トピックス】城跡、登録文化財調査等
- 【スポット】個人の労作『浦崎村史』



THE KOUTAJIMA LIGHTHOUSE AT ONOMICHI PORT, ONOMICHI.
台燈島歌小口關玄西港道尾方な麗壯 (港道尾)

小歌島のある風景

海上から小歌島を望む、手前には帆掛け舟が停泊している。戦前の写真絵葉書 尾道学研究会蔵



大正12年(1923)の市街図より小歌島

尾道駅前に降り立つと、尾道水道と対岸向島が見えます。灯台の建つこんもりとした目の前の丘陵は「小歌島」と呼ばれています。「島」が指し示す通り、現在は陸地であるこの丘陵のその昔は独立した小島でした。

小歌島、当て字によっては「岡島」と表記された場合も一部にあります。向島を古く「歌島」と呼称したことに対応した、小さい歌島の意味での命名と思われます。

この小さい島には、村上海賊以前の古い海賊の存在に始まり、近代には博覧会も開かれているなど、興味深い歴史に彩られていることはあまり知られていません。

今回の特集では、小さい向島(歌島)：小歌島が秘める歴史の断片をご紹介します。と思えます。

※：小歌島は私有地である為、無断で立ち入りは出来ませんのでご注意ください。

写真絵葉書 戦前 尾道学研究会蔵より 左側が向島～岩子島、右側が尾道。



海賊 関の大将

Kouta-jima, Onomichi.

島歌小道尾

小歌島の歴史を辿ると、中世南北朝時代に始まります。『備後風土記卷之四』（『備後叢書』第五巻収録）に、「向島西村岡島の城跡は河村摂津守影秀、明徳二年（1391）伯州より移り居城のよし」とあり、伯耆国（鳥取県西部）の河村摂津守影秀なる武将がここに城を構えていたようです。この河村某という武将についての詳しい素性は不明で、この記述以外に確認できる史料は見られません。

それから時代が下って、岡島（小歌島）城は河村某から海賊の拠る城に転じています。この地方で海賊と言えば村上上海賊で、後々には因島村上氏の出城として機能したようですが、当初期は村上とは別の海賊が存在したことが確認されています。それが「関の大将」と通称された海賊です。河村某との関係は不明ですが、城の立地からして、河村某が海賊的機能を果たしていた可能性も十分考えられます。

毛利元就の時代、小早川隆景率いる小早川水軍の前に関の大将は敗れ（福屋家文書中の元就・隆元連署状）、以降、因島村上氏の手に移るといふ経過のようで、江戸期の地誌類には「村上治部少輔」や「村上又三郎吉満」といった名前を城主として記録しています。但し、向島を含め小歌島が因島村上氏の所領になっていたかについては疑問が提示されています。



小歌島の海岸岩場には、写真のような小さな穴（岩礁ピット）が幾つか確認されますが、海賊時代の痕跡になるのかもしれませんが。



林真山画「尾道浦絵屏風」尾道市立美術館蔵より 尾道側から向島を望む。右から二面中の浮島が小歌島。沿岸砂浜は塩田らしい。

瀬戸内海勸業博覧会

博覧会



製複許不 (島歌小) 景全會覽博業勸海内戸瀬道の尾

海賊の出城の時代を経て、江戸時代以降は荒地、次いで畑地となっていた小歌島に、再びスポーツが当たるのが近代大正期で、俄かに埋立陸地化の動きが起こります（詳細は次頁）。その最中の大正13年（1924）の夏、この島を舞台に博覧会が開催されました。写真は開催記念で出された絵葉書で、「瀬戸内海勸業博覧会」とのタイトルが付けられています。

博覧会の概要を当時の報道（芸備日日新聞）から辿ると、帝国博覧会協会の主催で、大正13年7月20日から9月20日までの2ヶ月間の会期で開かれたようです。

主なパビリオンとして、東照宮の模型を展示する日光館、芝居上演の演芸館、古今東西の参考資料を集めた参考館などが設けられ、個人経営による食堂、南側には海水浴場も併設されました。また、全島に電飾が施され、新聞紙面（芸備日日新聞）には「海波に照り返し昼を欺くばかりのキラビヤカさ」とあります。

小歌島で博覧会が開かれた記録は記念絵葉書と報道のみで、『尾道市史』（新旧共に）『向島町史』の中では何故か一言も触れられていません。



製複許不 (東孝島) 會覽博業勸海内戸瀬道の尾



製複許不 (演藝館) 會覽博業勸海内戸瀬道の尾



製複許不 (門正) 會覽博業勸海内戸瀬道の尾



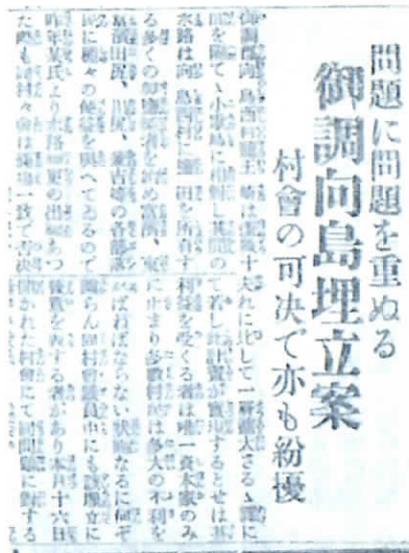
製複許不 (日光日) 會覽博業勸海内戸瀬道の尾

写真上・全景／同中・参考館／同下左から演芸館、正門、日光館 記念絵葉書より 尾道学研究会蔵



THE FINE VIEW OF KOUTAJIMA AND MUROJIMA
LOOKING FROM MT. TAHO (MT. SENKOJI) ONOMICHI.
む望久島向び及島歌小りよ(山寺光千)山寶大(港道尾)

陸地化が進む小歌島 写真絵葉書 戦前 尾道学研究会蔵



芸備日日新聞 大正12年3月25日付

博覧会開催に先立つこと6年前の大正7年(1918)、島の東側で操業していた尾道船渠造船所が、島の地先1万2900坪の埋立を県に申請しました。これに対し向島西村議会ではその賛否が分かれ、対岸の尾道市側では埋立反対を表明。反対意見の中でとりわけ指摘されたのが向島沿岸部で盛んな塩田への影響でした。

大正9年(1920)、地元での結論が出ないまま県から埋立の許可が出ますが、造船所側が延期した為、動きのないまま時が過ぎ、造船所が同12年(1923)に閉鎖されて埋立は頓挫することになります。

昭和2年(1927)、尾道港が第二種重要港湾及び開港場の指定を受け、本格的な港の修築計画が動き出すと、小歌島の海面埋立も再びクローズアップされることになります。

向島西村議会では、塩田に必要な水路の確保など条件付きでこれを認め、昭和7年(1932)夏に埋立が完成します。この時の土砂は、尾道港浚渫で得られたものが用いられました。

小歌島年表

- 【中世期】1391年(明徳2) 伯耆の武将・河村秀影が島に移り住み城を築くと伝(芸備風土記) / 1554年(天文23) 小早川隆景軍が尾道浦の海賊・関の大將を攻撃(福屋家文書) / 1588年(天正16) 毛利輝元が上洛の道すがら(秀吉と謁見) 小歌島に船を止め歌島(向島)を見物(輝元公御上洛日記)。
- 【近世期】1705~15年間(宝永2~正徳5) 松や竹が茂る荒地になっていた島を耕作して畑地が形成され、尾道町の大津屋善左衛門が収穫米を年貢納入(半田家文書) / 1713年(正徳3) 焚場としての利用願(天満屋治兵衛文書) / 1780年(安永9) 畑地から青銅製の小観音像が掘り出されると伝(瀬戸内水軍資料調査報告書)。
- 【近代期】明治初年: 繁茂する樹木を伐採し桜・梨・桃等植樹(備後向嶋岩子島史) / 1917年(大正6) 尾道船渠造船所が向島へ進出し隣接地で創業(町史) / 1918年(大正7) 尾道船渠が県に埋立申請、向島西村議会で賛否紛糾(芸備日日) / 1924年(大正13) 瀬戸内海勲業博覧会開催(芸備日日) / 1931年(昭和6) 埋立完了(町史) / 1933年(昭和8) 小歌島灯台初点灯(海保資料)。



【考古部会発】

日本遺産（村上海賊）事業とジョイントしての海城調査
（写真は因島中庄と田熊にまたがる青陰城跡にて）



【考古部会発】

文化財編の史跡の部で扱う山城の調査
（写真は木ノ庄町木梨の鷲尾山城跡にて）



【文化財部会発】

島嶼部での天然記念物調査
（写真は因島三庄町の五柱神社境内の社叢にて）



【文化財部会発】

近代建築を中心とした登録文化財の調査
（写真は尾道市水道局長江浄水場配水池にて）



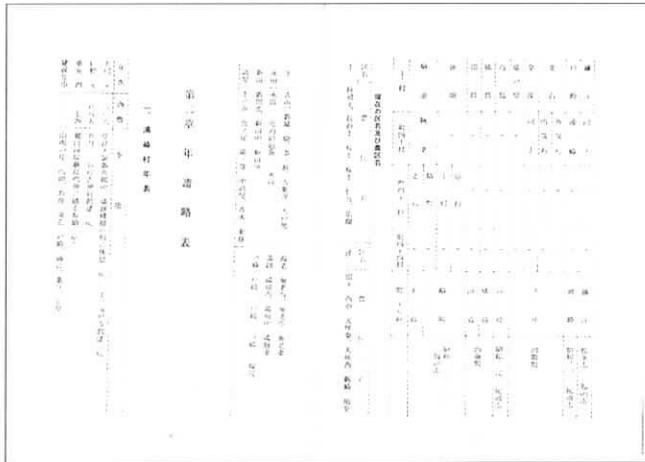
【事務局発】

広島県史編さん時に確認された古文書の追跡調査
（写真は市内の旧家に遺された近世～近代の文書群）



【民俗部会発】

信仰の部で扱う神社を巡見調査
（写真は浦崎町の住吉神社にて中世の手水鉢を確認）



個人の労作 『浦崎村史』

『尾道市史』（新旧）、『因島市史』が青木茂氏一人の手によって編まれた（編著）事は知られるところですが、同様に個人の労作として『浦崎村史』の存在があります。

昭和59年（1984）5月に刊行された『浦崎村史』（全一卷）は、浦崎村助役を経て、尾道市浦崎支所長を歴任された小畑正雄さん（写真・故人）の編著になる一冊で、還暦を迎えて村史編さんを発起され、18年の歳月をかけて完成されました。

全689頁に及ぶ村史は、総誌に始まり人文・地文、行政、教育文化、産業、兵事兵役、社会、村財政、社寺宗教、人物、史跡・古文書で構成され、細かく丁寧且つ充実したその集積と編集・著述作業には目を見張るものがあります。小畑氏によるこの積み上げが、新市史にとっても大きな一助になることは言うまでもありません。

『浦崎村史』は、尾道市立中央図書館、広島県立図書館で閲覧できます。

『新尾道市史』刊行計画

市制施行120周年にあたる平成30年度を振出しに、40年度までの11年計画で、新市域を網羅しての『新尾道市史』を編さんします。全11巻の刊行スケジュールは次の通りです。

平成30（2018）年度 文化財編 上巻

平成32（2020）年度 文化財編 下巻
資料編 近世

平成33（2021）年度 資料編 近代・現代

平成34（2022）年度 資料編 古代・中世

平成35（2023）年度 民俗編

平成36（2024）年度 地理編

平成37（2025）年度 通史編 原始・古代・中世

平成38（2026）年度 通史編 近世

平成39（2027）年度 通史編 近代

平成40（2028）年度 通史編 現代

WANTED

史資料や情報をお寄せください

古文書や古写真（写真絵葉書を含む）、古地図、尾道的话题を報じる古新聞など、市史編さん委員会事務局では、幅広い分野において尾道に関わる史資料を収集しています。また、無形の伝承（地域に伝わる言い伝えや独特な慣習、祭礼芸能等）についても収集対象となります。もし皆様のお宅や周辺で、あるいは地域で、そうしたものが発見される場合は、事務局へご一報下さい。史資料については複製（写真撮影・コピー）を取らせていただくのみで、現物については速やかにお返しさせていただきます。情報提供は下記の事務局連絡先までお願いします。お電話での受付時間は平日9:00～16:00（以降は文化財係：0848-20-7425へお願い致します）

編集後記*2018.5

こんにちは！行く春が惜まれる今日この頃、お元気でいらっしゃいますか？

市史編さん委員会事務局は3年目を迎え、とうとう『新尾道市史』第一巻発行予定の年度となりました。市史広報もはりきって、調査の進捗状況をご報告して参ります。

今回の特集では、旧市街を中心とした前回と打って変わって、尾道駅に降り立つとすぐに私たちの目に現れる小歌島についてご紹介いたしました。かつて、海の領主たちが築き上げた歴史ロマン、そして近代に下って開催されたという謎の博覧会等々、小歌島の魅力を皆様にお伝えすることができたのではないかと思います。様々な歴史を包含する尾道、今後も市史広報では尾道の魅力を発信して参ります。次号もお楽しみに！

※『市史広報』は年に2回程度の発行を予定しております。みなさんの様々なお声や情報をお待ちしております。